

「塔本シスコ展 シスコ・パラダイス  
かかずにはいられない！人生絵日記」

開催報告


**塔本シスコ展 Tomoto Shisuko's Paradise**  
 I Can't Help But Paint: A Picture Diary of My Life  
**シスコ・パラダイス**  
 かかずにはいられない！人生絵日記

(古筆の巻、宇布の巻) | My Old Family Home and Pomeio Trees 1955年 竹筒、漆器、フタリペー  
(文庫) | Sun 制作年不明 漆器、しんがし、漆器、フタリペー



「絵巻の嵐」(巻)に19万人  
 福語小学校/島ヶ原ケイマです。とても大きな声で、唄います。 1993.5.5. シスコ80才+

2022年2月5日(土)→4月10日(日)

開館時間 | 10:00-20:00(展覧会入場は19:30まで) 休館日 | 火曜日  
 観覧料 | 一般1,100(900)円、シニア(65歳以上)900(700)円、学生[高校生以上]600(500)円、中学生以下無料

主催 | 熊本市現代美術館(熊本市、公益財団法人熊本市美術館文化振興財団)、熊本日日新聞社、熊本放送  
 協成 | 美術振興協賛会  
 後援 | 熊本県、熊本県教育委員会、熊本県教育協会、熊本県文化協会、熊本県美術家連盟、  
 熊本県観光コンベンション協会、J:COM、エフエム熊本、FM791

**熊本市現代美術館** 〒860-0845  
 CAMK Contemporary Art Museum, Kumamoto



●新型コロナウイルス感染症の状況によっては、観覧料や観覧日ベ  
 ントの中止、観覧内容に変更が生じる場合がございます。所定のご来  
 場時については、当該ホームページ及びSNSにて随時ご告知いた  
 します。入館に際してはマスクの着用、手洗い・検温、手洗いの消毒などご協  
 力をお願いします。  
 ●入館前に本館にてチェックインの記入(氏名、電話番号)をお願いして  
 います。

《鳥の巻》 | Bird Spirit  
 2009年 巻、アクリル画



〒860-0845 熊本市中央区上通町2-3 2F 2022年 熊日本館3F  
 Tel.096-278-7500(代表) www.camk.jp

熊本市現代美術館

塔本シスコ展 シスコ・パラダイス

かかずにはいられない！人生絵日記

会期 2022年2月5日(土) - 4月10日(日)

会場 熊本市現代美術館 ギャラリー1・II

1913（大正2）年、熊本県八代市に生まれ、宇城市で育ち、2005（平成17）年に91歳で亡くなるまで膨大な作品を残した塔本シスコの画業を、絵画やスケッチを中心に、空き瓶や箱など身の回りにあるあらゆるものをキャンバスとして描いた約200点を通して振り返る回顧展。世田谷美術館を立ちあがりとして、熊本市現代美術館、岐阜県美術館、滋賀県立美術館を巡回した。

小学校を中退後奉公に出て、正式な美術教育を受けることのなかったシスコは、53歳のある日、息子の残したキャンバスの絵の具を包丁で削り落として絵を描き始める。自身のなかに湧きおこる夢と喜びを制作の源泉として「私は死ぬるまで絵ば描きましようたい」と絵筆をとり続けたその人生は、コロナ禍にも関わらず、多くの人々の共感を呼んだ。

全7章に分けられた会場では、「どがんねえ、よかでしょうが」等、生涯熊本弁を話し続けたシスコの言葉から、すべての章タイトルをつけている。第1章は熊本での初期作品、第2章は大阪移住後に好んで描いた山田池周辺の風景、第3章は熊本での子ども時代を振り返って描いた作品、第4章は丹精込めて世話をしていた庭の植物や生きものなど、団地の4畳半のアトリエから無限に広がる世界、第5章は家族の肖像や様々な人々との出会い、第6章は晩年好んで描いた月のモチーフを中心に、第7章はスケッチをはじめ空き瓶などあらゆるものに描いたシスコの作品を紹介した。

関連事業としては、シスコ作品の裏側に注目してそれらの画像をアーカイブ化して掲載した「シスコの裏側美術館」ほか、《ふるさとの海》に描かれた「踏み上げ漁法」を不知火海沿岸で現在も行われている方を取材し、紹介動画を作成した。同作品に描かれた蒸気機関車や永代橋の当時の写真を、SNSを通して探したところ、多くの情報が寄せられた。

最終日前日には、コロナによって延期になっていたイベントを行った。シスコの孫である福迫弥麻氏と、シスコ作品を熊本市現代美術館で初めて見て感銘を受け、その後様々な場面でシスコ作品を紹介している作家のいしいしんじ氏をゲストに、第1部にトーク、第2部ではいしい氏による蓄音機を用いた音楽イベント「シスコ de ディスコ」を開催した。

編集：坂本顕子（熊本市現代美術館教育事業班主査・学芸員）



